



日本プライマリ・ケア連合学会
中部ブロック支部 活動報告

発行人：佐藤 寿一
事務局 〒466-8560 名古屋市昭和区鶴舞町 65
名古屋大学医学部附属病院総合診療科 内
E-mail:sato.juichi.v7@f.mail.nagoya-u.ac.jp

ニュースレター No. 48 (2024. 12) 本号の編集担当者 吉岡哲也

【支部情報】

予定

1) 『中部ブロックポートフォリオ発表会*2025』

2025 年 3 月 15 日 (土) ZOOM によるオンライン開催

2) 『第 14 回日本プライマリ・ケア連合学会中部ブロック学術集会』

2025 年 11 月 30 日 (日) 会場：福井県内

報告

1) 『第 13 回日本プライマリ・ケア連合学会中部ブロック学術集会』

2024 年 11 月 24 日 (日) 会場：じゅうろくプラザ

2024 年 11 月 24 日午後、じゅうろくプラザにおいて、第 13 回日本プライマリ・ケア学会中部ブロック支部学術大会が開催されました。参加者は 73 名でした。

午前中には、岐阜大学医学教育開発研究センター教授 西城卓也先生の講師のもと、指導医講習会も開催（ファシリテーターとして FD の森永大輔先生、日比野将也先生、山口佳子先生、高橋先生にもご参加いただきました）。「教育同盟」を理解し、現場教育への応用・実践を議論できるようになろう」「“適応型リーダーシップ”を理解し、組織運営への応用と実践を議論できるようになろう」の 2 つのテーマについて活発にグループワークが行われました。



一般演題発表

さて、学術集会ですが、以下のように若い方が中心に発表されました。一般演題は、質問時間を 7 分と多めにとったのですが、教育的な質問も含め活発な討議がなされました。

座長 県北西部地域医療センター国保白鳥病院副院長 伊左次悟

1. 「体位変換によって下肢痛が改善した Stanford A 型急性大動脈解離の一例」

みたき総合病院 総合診療科 二宮隆仁

2. 「抗毒素血清やセファランチンを投与せず良好な転帰を得た小児マムシ咬傷の1例」

中濃厚生病院 小児科 伊佐治寛太

3. 「終末期において ICF（国際生活機能分類）が活用できた一例」

関中央病院 総合診療科 山口莉穂



【メインテーマ】

診療報酬改定など、昨今のいわゆる Dx は大変話題であります。そこで今回は「プライマリケアにおける遠隔診療」と題して、地域医療におけるオンライン診療の第一人者である原田昌範先生の講演の後、それぞれの活用方法について、3人の医師から講演をいただきました。

基調講演

座長 県北西部地域医療センター長、自治医科大学教授 後藤忠雄

演題「遠隔医療を活用した地域医療支援～厚労省の実証から～」

講演者 山口県立総合医療センターへき地医療支援センター センター長 山口県防府保健所 所長

山口県健康福祉部医療政策課 へき地医療支援機構へき地医療専任担当官 原田 昌範

へき地・離島の医師不足は年々深刻であり、非常勤化する診療所が増え、医師が不在となる時間帯は、医療へのアクセスが特に制限される。オンライン診療は、元来、へき地・離島で限定的に認められてきたが、平成30年にへき地等に限らないオンライン診療の指針が整備された。しかし、その利用はコロナ禍を経ても都市部に集中し、離島やへき地において、有効に活用されている事例はまだ少ない。厚生労働行政推進調査事業として、平成30年度から「へき地医療の推進に向けたオンライン診療体制の構築についての研究(H30-医療-指定-018)」、令和3年度から「海外の制度等の状況を踏まえた離島・へき地等におけるオンライン診療体制の構築についての研究(21IA2007)」の機会をいただき、海外の好事例を参考に山口県内で実証し、その効果や課題を整理し、モデルを全国に発信した。

コロナ禍、国内における医療DXの遅れが表面化した。令和3年度から新型コロナウイルス感染症対策室を兼務、令和4年度から保健所長として、コロナ対策を通じて、臨床的な立場に加え、行政的な立場からも様々な医療的な課題を経験し、前述の実証事業の経験からコロナ対策においても医療DXを積極的に活用することで、災害レベルの事態に対応できた。

これらのコロナ対策で実践された医療DXの経験は、第8次保健医療計画を策定にも活かされ、へき地医療対策にも書き込まれた。人口減少が著しいへき地医療において、どうやって持続的に医療を確保するのか。山口県は、オンライン診療やクラウド型電子カルテの導入、医療MaaS、郵便局の活用など、医療DXを積極的に組み合わせ、多職種と連携し、へき地・離島の医療を面で持続的に確保する取り組みを進めている。

また、シンポジウムとしてはそれぞれの立場から遠隔診療の実際を話していただいた。

シンポジウム「遠隔診療の様々な活用事例」

司会 県北西部地域医療センター長、自治医科大学教授 後藤忠雄

1. 集会所/診療所を活用した D to P with N

県北西部地域医療センター国保白鳥病院 廣瀬英生

当センターは、郡上市、白川村、高山市で構成される地域医療推進法人であり、広大なエリアの診療をカバーしている。オンライン診療は、人口過疎地への医療提供、医師をはじめ患者の移動負担を減らすなどの効果が期待されている。当センターでは、岐阜県事業の一環として、モデル事業①診療所で医師が診療を行わない日に看護師・事務員が診療所へ赴きオンライン診療を行う（Dr to Pt with Ns）とモデル事業②医療機関がない地域において集会所を活用したオンライン診療を行う（Dr to Pt with Ns）を開始した。

モデル事業①小那比地区は、当院から車で 40 分の距離があり、数名の患者診察のために医師を半日拘束するという状態であった。モデル事業②阿多岐地区は、当院の診療圏ではあるが通院経路に峠があり、患者にとって通院アクセス困難な場所にあった。

オンライン診療患者、関わったスタッフ（医師、看護師、医療事務、オンライン担当事務）対象に受付・診療・処方箋発行・会計までオンライン診療全体のスムーズさについてアンケートを実施した。

結果は、意外に患者はオンライン診療で話すことに対して違和感がない印象であった。医師にとっては移動時間がない分、病棟業務、透析業務、内視鏡検査などに対応することができ医師の働き方の効率化を図れる可能性があった。集会所では処方箋発行、会計処理が煩雑であった。課題として挙げたのは、集会所を活用したオンライン診療患者への薬剤配達があった。

今後の展望として、医師不足を考慮し他の診療所、集会所（地区）に関しても、対面診療からオンライン診療への切り替えを検討すべきと考えられた。さらに、移動診療車の導入について検討し、より効率的な方法を考えていきたい。

2. オンライン診療車を用いた地域医療支援の試み

小国公立病院 片岡恵一郎

熊本県阿蘇地方北部に位置する「小国郷」は、小国町と南小国町を含む地域で、新 1000 円札の肖像に選ばれた北里柴三郎博士の出身地として注目を集めている。この地域で唯一の病床を持つ小国公立病院は、両町による一部事務組合が運営する 73 床の医療機関である。

2023 年時点での小国郷の人口は約 1 万人、高齢化率は約 42%と全国平均を大きく上回る。約 250 平方キロメートルという広大なエリアに過疎地が点在し、診療所は民間クリニック 2 施設のみとなっている。人口減少による生産年齢人口の減少は、医療業界に限らず地域全体の深刻な課題となっており、車を持たない住民の通院手段も十分とは言えない状況にある。

こうした地域課題の解決を目指し、令和 5 年度デジタル田園都市国家構想交付金の支援を受け、「小国郷医療 MaaS・DX 推進事業」を立ち上げた。

まず、2023 年 7 月より閉院予定だったクリニックの診療・運営を公立病院で引き継ぎ、医療 MaaS の診療拠点とし、遠隔診療システムの構築を行った。医師は診療拠点で対面診療をしながら、同じ診察室で病院外の患者をオンラインで診察できる体制を整えた。

2024 年 1 月よりオンライン診療車「柴三郎号」を導入し、医療アクセスが不十分な地域での診療を可能にした。現在、週 3 回、小国郷内の公民館や小学校跡地など 15 か所で診療を実施している。対象は慢性疾患で症状が安定している患者で、主治医が推奨する場合に利用可能である。診療は看護師による事前の問診と生体情報の取得後、医師

がオンラインで診察を行う形式を採用している。

診療車には医療機器や通信設備が整備され、視覚・聴覚・嗅覚・触覚など五感に配慮したデザインにより、病院以上の医療体験を提供できるよう工夫されている。

さらに、今回のプロジェクトのもう一つの柱である医療 DX を推進すべくシステム構築中である。病院と診療所の医療データ、健康診断データ、マイナンバーカード、パーソナルヘルスレコードなどの地域のデータを一元管理し処理できる体制を整えることで、オーダーメイドの予防医療の可能性を模索中である。

本プロジェクトは、行政、地域住民、大学と連携し、地域に適した医療サービスの持続的な提供体制の確立を進めている。人口減少地域の医療アクセスと生活の質の向上を図り、他地域でも活用可能なモデルケースとなることを期待している。

3. 遠隔診療を用いたセカンドオピニオン

名古屋第二赤十字病院 宮部勝之

近年医療 DX の推進を行ううえで、遠隔診療が行われるようになってきた。当院では、2020 年 4 月より医療 ICT 検討プロジェクト発足させ、2021 年 4 月にはさらにこれがデジタル化委員会となり遠隔診療を推進していく原動力となった。

当院では導入しやすさの観点から、MISIN 社の CURON を導入し、遠隔診療を開始した。具体的には、全国より集まる当院移植外科における遠隔診療に最も利用されている。ソフトウェアはクロムを使用し、通常 1 か月半ごとに対面診療と遠隔診療を交互に実施している。最大の長所は、当院と距離の離れた場所からでも診療を行うことができるようになることで交通費がかからず、冬の雪道を運転して来院せずに診療を行うことができる点が挙げられる。また、自宅の内部をリアルタイムに映し出すことで、生活環境を知ることができる点も、対面診療では得られないメリットであることが分かった。反面、電子カルテと直接連携したソフトウェアでないことから医療費算定に煩雑さがあることや、予定された時間に必ずログインしなければならないこと、血液検査などを直接行うことができず、症状が発生したときの対処に困ること、などが考えられる。

当院では今後、セカンドオピニオン外来、安定した難病患者の診察を含め、他部門でも遠隔診療を導入していく計画であるが、2024 年 2 月に電子カルテシステムを更新したことを受け、今後遠隔診療も付属のアプリケーションである富士通社 LifeMark-Telehealth を使用したものに切り替えていく予定であり、現在アプリケーションの調整を行っているところである。このアプリケーションを用いることで、予約から診察、会計までをスマートフォンで完結させることが可能で、富士通 HX 電子カルテシステムと連動した遠隔診療が可能である。まだ問題もある遠隔診療ではあるが、改善を目指していくことで患者満足度の向上につながっていくものと考えている。

4. 質疑応答

まとめ

今後、地域医療において医師不足が課題として挙げられます。一方で、人口が減少にも対応しなくてはなりません。効率よくかつ住民に寄り添える医療の一形態としてオンライン診療は一つの可能性と考えられます。今回の中部ブロック支部会をきっかけに東海地区でも輪が広がっていくことを願います。

2) 『PCs 中部秋合宿 in 今庄』

2024 年 11 月 9 日、10 日

2024 年 11 月 9 日（土）、10 日（日）に PCs 中部（地域医療に興味がある医学生看護学生らの団体）が、家庭医療学夏期セミナーに刺激を受けて、2024 年 11 月 9 日（土）、10 日（日）に PCs 中部秋合宿 in 今庄を開催しました。各地で精力的に学んでいる三重大学・富山大学・福井大学の医学生・看護学生が福井県南越前町今庄地区を訪れました。

- ・事前オンラインレクチャーで今庄地区について見識を深める。
- ・ゲストハウス 地域まるっと体感宿玉村屋、中谷翔さんのご講演 『“地域と自分“を考える』でキャリアを学ぶ。
- ・地域診断フィールドワークにて住民と触れ合い、地域へのアクションプランを考える。
- ・成果発表会で、講師の奥知久先生から貴重なフィードバックを頂戴しながら、住民と理解を深める。
- ・講師の久野哲弥先生の、総合診療専門医の研修生活や福井の GGG（総合診療・総合内科センター）を活用しての研修プログラムについてのご講演を聴く。

といった内容を開催しました。本企画を通して、中部地区のプライマリ・ケアの現場に興味を持つ方が増えますように。この度は貴重な機会を頂戴しましたことお礼申し上げます。ありがとうございました。

●岐阜支部

【活動報告】

1) 2024 年度第 3 回ぎふ総合診療レジデントデイ

日時：2024 年 9 月 13 日（金）13：00～17：00

場所：岐阜大学医学部本館 6 階多目的室

参加：13 名（指導医 3 名、専攻医 10 名）

内容：1. オープニングの講義

2. コアレクチャー 組織マネジメント

3. 研修プログラムの改善に向けた会議



2) 2024 年度第 4 回ぎふ総合診療レジデントデイ

日時：2024 年 11 月 8 日（金）13：00～17：00

場所：関中央病院

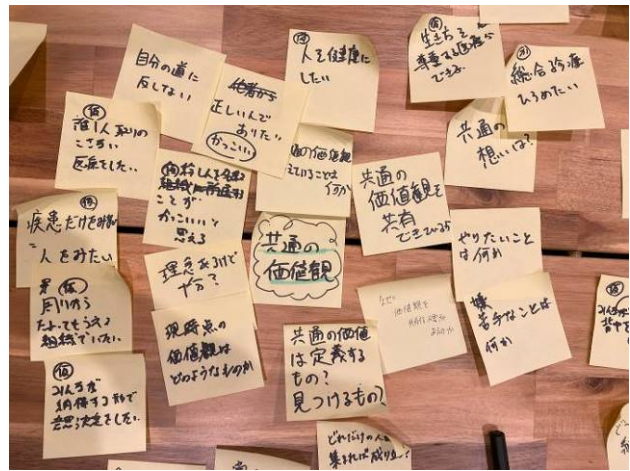
参加：9 名（指導医 2 名、専攻医 7 名）

内容：1. 困難事例検討会とレクチャー（60 分）

2. 鑑別疾患ブラッシュアップ

（簡易事例検討会、5 minutes Differential Diagnosis Brush Up）（30 分）

3. 総合診療科の医局会（プログラムの改善にむけての会議、今後の予定などの確認）組織についてマッキンゼーの 7S をフレームにして、疑問を出し合い、私達が目指すべき組織のありかたについて検討、意見の抽出を行った（150 分）



3) 第 8 回在宅診療で役立つ超音波検査ハンズオンセミナー（腹部・血管）

日時：2024 年 10 月 12 日（土）13：00～16：00

場所：総合在宅医療クリニック（岐阜県羽島郡岐南町薬師寺 4-12）

参加：40 名（企画 1 名、指導者 9 名、被検者 9 名、受講者 21 名（指導医 3 名、専攻医 5 名、研修医 13 名））

内容：1. 講義 腹部・下肢静脈エコーとその到達目標

（岐阜県総合医療センター 清水省吾医師・長屋麻紀臨床検査技師） 50 分

2. 腹部・下肢静脈エコーハンズオンセミナー 100 分

3. 講義 腹部・血管異常エコー

（岐阜県総合医療センター 青木美由紀臨床検査技師・高木理光診療放射線技師） 20 分

4. 到達目標到達度アンケート記入 10 分





●静岡支部

【活動報告】

1) 第 23 回しろわカフェ開催(御前崎市家庭医療センターしろわクリニック) 2024 年 10 月 17 日(木)

10 月 17 日(木)に第 23 回しろわカフェを開催いたしました。しろわカフェは市民向けの公開講座です。

今回のテーマは、「運動と栄養管理で健康寿命を延ばそう！」です。サルコペニアとは？ロコモティブシンドロームとは？フレイルとは？を解説いたしました。また、タンパク質の多い食事を摂り、運動は楽しく継続することの大切さを学びました。しろわカフェ内で実際に、大腿四頭筋の運動、踵あげ運動、握力を高める運動を行いました。今回も大盛況のうちに終了いたしました。

第23回しろわカフェ

講演内容

「運動と栄養管理で健康寿命を延ばそう！」

担当講師：しろわクリニック家庭医 増田 竜樹 先生

開催日時：10月17日(木) 14:00-15:00

開催場所：しろわクリニック
御前崎市白羽3521-10 TEL: 0548-23-3211

体のチェックと簡単な予防運動も指導します！



2) 「はじめての日本語ひろば」へのボランティア参加(菊川市家庭医療センター) 2024 年 9 月

9 月 7 日(土)に「はじめての日本語ひろば」にボランティアとして参加してきました！

「病院」をテーマに、外国人の方が病院やクリニックのわかりづらさ、受診しづらさを少しでも解消し、実際に体調不良になった時に障壁なく医療にアクセスできるように工夫しました。

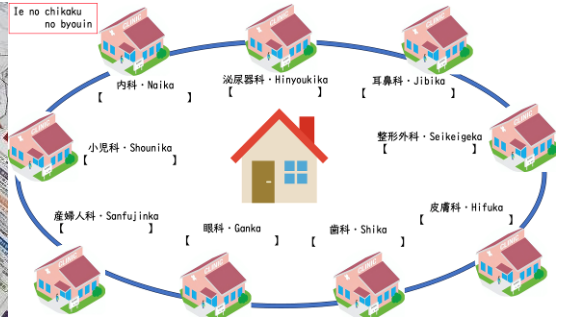
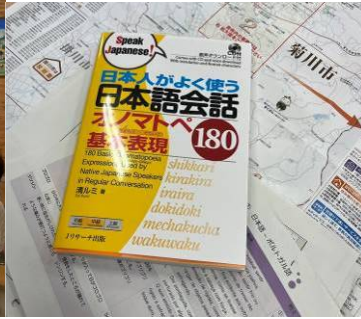
- ①この症状はこの診療科
- ②自分の家の近くのクリニックを地図で探す
- ③問診票を書いて、診察を受けるロールプレイ
- ④医療受診の相談・質問タイム
- ⑤医師による健康相談

<活動・対話での気づき>

日本での健診や受診はわかりにくいことが多い。特に健診の対象年齢や雇用形態による違い、どこに受診すればいいか迷うケースもある。多くの外国人は大きな病院の存在は知っているので体調不良時に病院に直接行ってしま

が、その結果初診料が高額になる。動物アイコンがあるクリニックや診療科別のシンプルなマークが視覚的に理解しやすい。こうした工夫で、外国人にも受診のハードルを下げられる。

菊川市家庭医療センター 専攻医 森田



3) 救急対応訓練 開催（森町家庭医療クリニック） 2024 年 9 月

森町家庭医療クリニックでは 2024 年 9 月 19 日にスタッフ全職員が参加し、巨大地震発生を想定した災害対応訓練を開催しました。BCP 担当専攻医がリーダーとなり、まずは「地震・火災時初期対応マニュアル」の内容を全員で確認、クリニック内の避難経路、消化器設置場所の確認を行いました。

その後は患者役、職員役の 2 チームに分かれて「診療時間内に巨大地震が発生した。」というシチュエーションで訓練が行われました。昨年も参加した職員は昨年の反省を踏まえて訓練を遂行でき、今年が初めての参加となる新職員は災害時に備えて手順や導線、自分や他職員の役割を学ぶことができました。訓練の振り返りでは「こういった場合はどう対応するか」など活発なディスカッションが行われ、多職種での訓練は診療所でのチームビルディングにおいて非常に有用な機会となっています。



●三重支部

【活動報告】

1) レジデントデイ

日時：2024 年 9 月 24 日（火）15:00～18:30

会場：三重大学医学部内講義室

三重総診レジデントデイを開催。

専攻医 5 名、研修医 1 名、指導医 7 名が参加しました。

ビデオレビュー、ケースディスカッションなど、

学びの多い勉強会となりました。



2) ポートフォリオ発表会

日時：2024年9月29日（日）9:00～11:00 Zoom

会場：Zoom のブレイクアウトルームを使用してオンラインでの実施

【今後の予定】

1) 総合診療 虎之穴「亀山・関宿合宿」

日時：2025年1月11日（土）～1月22日（日）

会場：亀山市縫合保険福祉センター「あいあい」

演者・演目：

- ・医学生・若手医師のための誰も教えてくれなかったノンテクニカルスキル（笹本浩平先生：名張市立病院）
- ・ネガティブキャンペーンから学ぶ総合診療への誤解と真実（現役総合診療医たちのシンポジウム）
- ・ハンズオンセミナー：プライマリ・ケアに必要な小外科手技（堀端謙先生：亀山市立医療センター）

ほか

2) 第4回 MieGP12 総合診療フォーラム

日時：2025年2月8日（土）12:30～17:00

会場：三重大学地域イノベーションホール（地域イノベーション研究開発拠点 C 棟 3 階）

第1部 12:30～13:30 学生企画「地域診断ワークショップ（仮題）」

【対象】地域の医療・福祉に関心のある学生、研修医

第2部 14:00～17:00 フォーラム「総合診療医を育てるための初期研修教育とは？」

総合診療医を育てるための初期研修医教育とは？

医学生が最もなりたい診療科トップ3に入る総合診療科。しかし臨床研修（初期研修）では臓器別専門科のローテーションが主であり、その関心を保つのは容易ではない一面もあります。臨床研修を通じて、ジェネラリストへの夢をふくらませ続けるためにどんな工夫やコツがあるのでしょうか。本フォーラムは、学生・研修医・専攻医の立場からの声を共有し、総合診療医教育のエキスパート、鈴木富雄先生の講演から学び、これからの総合診療医養成をみんなで議論し創造します。

【概要】招待講演：鈴木富雄（大阪医科薬科大学総合診療部教授）、研修医のプレゼン、グループワーク等

【対象】地域医療・総合診療医養成に関心のある指導医、教員、医療職、行政職、事務職、学生、研修医および

参加申込み：<https://forms.gle/Mb5vTfRZwUyh1cLDA>

（事前登録締切り：2025年1月27日（月）；当日参加も歓迎です）

●福井支部

【活動報告】

1) Choi+（ちょいたす）

2) GGG 対面セミナー

3) 2024.10.7 PIPC 福井大学セミナー

4) 第8期健康のまちづくりアカデミー開講

5) 市民公開講座

6) 永平寺町多職種連携研修会 共催：永平寺町立在宅訪問診療所・永平寺町社会福祉協議会地域包括支援センター・株式会社ツムラ

1) 2024. 09. 07 福井大学 医学生対象の勉強会 Choi* (ちょいたす) を開催しました。

今回のテーマは「秋のエコー祭り勉強会」 プローベの持ち方から描出まで



2) 2024. 10. 06 GGG 対面セミナーを開催しました。

洛和会丸太町病院 救急・総合診療科 上田 剛士先生 「地図で学ぶ医学」

獨協医科大学 総合診療医学・総合診療 志水太郎先生 「診断が上手になる方法」

ここでしか聴けない情報盛り沢山のセミナーとなりました。



3) 2024. 10. 7 PIPC 福井大学セミナー

信愛クリニック院長の井出広幸先生にお越しいただき専攻医、指導医向けに PIPC (Psychiatry In Primary Care) についてご講演いただきました。

何となく、精神的な疾患が隠れていそうだなと感じる患者さんに遭遇することは日々の外来で多々あります。そんなときにどうすればよいのか、初学者向けの内容から、かなり立ち入った熟練者向けのお話まで多岐に渡るお話をしていただきました。

具体的な内服に関するお話ではクエチアピンの有用性について知りました。こんな時にも使ってよいものなのか、という情報が多く、DMには気を付けながらも処方幅を広げてみようと思いました。また、自分が自分をどう思っているのか、が他人にどう思われているかに反映される、つまり自己解釈が人間関係に直結するというお話が印

象的でした。精神的な疾患を抱える患者さんに限らず意識して診察してみようと感じました。

懇親会でも日常診療で困っていることなどについて医局員からの質問はやまず大盛況で幕を閉じました。今回学んだことを日々の診療に大いに生かしていきたいと思います。

4) 2024. 10. 12~14 第8期健康のまちづくりアカデミー開講！

健康のまちづくりを広域多職種連携協働・理論×実践で学ぶセミナー事業「健康のまちづくりアカデミー」、第8期が開講しました。秋に多分野のまちづくりの講義やワークショップを受け、春に健康のまちづくりを実践、成果発表し修了の予定です。学部生から地方公務員まで、幅広い参加者が全国から5名参加されています。

<http://www.kenko-machizukuri.net/academy/>



5) 2024. 10. 26 福井大学 文京キャンパス アカデミーホールで市民公開講座を開催しました。

今回の講座は、ドクターGの知っ得！冬に備えた救急疾患のピットフォール



6) 2024. 11. 27 永平寺町多職種連携研修会

共催：永平寺町立在宅訪問診療所・永平寺町社会福祉協議会地域包括支援センター・株式会社ツムラ

2024年11月27日に永平寺町多職種連携研修会を開催いたしました。今年度は中医学・漢方薬と在宅診療というテーマで、永平寺町立在宅診療所から教育講演として「当院の在宅における漢方薬の使用状況について」、特別講演は香川県、敬二郎クリニックより三宅 敬二郎名誉院長先生にお越しいただき「私の在宅診療 20年〜仏法と方剤とともに〜」をご講演いただきました。教育講演では実際の在宅診療における人口動態・疾病内容・投薬状況をまとめ、使用されている方剤・どのような証（症候・病態）が多いのかを解析し、症例報告・内服におけるコツなども解説いたしました。

三宅先生からは大変含蓄の深い、ACPに関わるような内容で仏法（仏教）からのメッセージをいただきました。道元禅師の「志のある人は、人間は必ず死ぬということを知っている。志のない人は、人間が必ず死ぬということを実感の意味で知らない」という言葉や、原始仏教の一二縁起を説明する四聖諦を交え、人は生まれたからには必ず死ぬ「生死一如」についての自覚を解説いただきました。

在宅医療においては患者さんを積極的にCUREすること(Doing)はできなくとも、そばにいてCAREすること(Being)することはできる。三宅先生ご自身の医師としてのルーツはご祖父様、ご尊父様の町医者としての姿、ひいてはご自身のHero（アンパンマン的な、何事からも逃げない姿）にあるとのことでした。それに裏打ちされる形で患者さんのすべてを観る在宅医となり、仏法や漢方方剤とともに患者とともにある「共同 ぐどう」の境地に至ったのだと感じました。在宅医療にかかわる者として心の中心に置かねばならぬ根幹であると実感しました。

ご来場の聴講者には医師・歯科医師・看護師・ケアマネジャー・介護士・介護施設関係者・学生そして患者さんがいらっしゃいました。以下聴講者の感想を抜粋しました。

「何もできないのではなく、その人のそばにいる、その人を判ろうとする、とてもためになりました。“お家にかえろう”を応援していきたいと思いました。」「コミュニケーションの重要性を再確認できました。Being, その方らしい人生、豊かな人生のお手伝いができるよう、その方らしい生き方に寄り添いたいと坎じました。」



●富山県支部

【活動報告】

☆学生勉強会(2024年11月27日)

今回は「病気に対する告知について」をテーマとしました。自身も臨床現場で告知を行う場面は少なからずありますが未だに日々悩みながら行なっています。

「明日の記憶」という映画を学生さんと一緒に見ながら、告知について学生、指導医ともに考えを深めることができました。学生さんからも活発な意見が出て、指導医側も改めて告知について考え直すいい機会になりました。今後も様々なテーマ、手段で総合診療の魅力や考え方を伝えていければと思います。

☆ブロック注射トレーニング (2024年11月21日)

富山大学附属病院総合診療科で前皮神経絞扼症候群 (ACNES) に対するエコー下ブロック注射のトレーニングを行いました。エコー下ブロック注射の先行研究を基に作られたこんにゃくや鶏肉のモデルを用いて行ったシミュレーションはとてもリアルでした。臨床選択実習中の学生さんにも挑戦いただき、皆で有意義な実習を行うことができました。実臨床でも生かしていきたいと思います。

☆研究勉強会

<第1回目> 令和6年5月30日

初回のテーマは「AIを活用した文献検索」 (北啓一朗先生) & 「学会の歩き方」(武島健人先生)の二本立てでした！

北先生による文献検索は今年で3回目のご講演ですが毎年新しい情報をご共有くださっています。

今年は、今や臨床にも研究にも身近な存在となったAIをテーマに、北先生オリジナルのAIお勧めリストや、普段からの活用術について Tips を教えていただきました。

後編の武島先生による「学会の歩き方」では、PC学会を間近に控え、参加される皆さんへ、そして来年度以降の参加を考えておられる

専攻医の先生向けに、双方向プログラム参加の楽しみ方やネットワーキングの面白さをご発表いただきました。

充実したキックオフ・ミーティングとなりました！

<第2回目>令和6年9月19日

専攻医の戸田先生より、病院でのプライマリ・ケアや訪問診療を行う中での臨床研究のアイデア出しを行っていただき、みんなでディスカッションしました。

高齢者医療に携わる中でのジレンマや現状について、みんな悩むポイントは似ており、議論は思った以上に盛り上がり、またリサーチクエスションも深まりました。

引き続き、若手の先生方が現場での臨床疑問を言葉にし、さらにリサーチクエスションへと発展させていく楽しみを感じていただけたらと研究班一同一緒に学ばせていただけたらと思っております！

☆しろえびカンファランス (専攻医勉強会)

今回は専攻医の mini-CEX (実際の診療風景を動画撮影し、その動画を通して専攻医の診療態度等を評価すること)を行いました。自分では気が付きにくい診療時の癖や仕草を改めて評価されるのは得難い経験ではないかと思います。Discussion を通じて、専攻医・指導医ともに今後の診療への姿勢や考え方などに良い影響があったのではないのでしょうか！

後半は専攻医によるポートフォリオ発表会を行いました。

今回は「患者中心の医療」に関するテーマが多く発表されていました。

様々な症例がある中で「患者さんとの関係性を構築・強化しつつ、疾患と病の両方の経験を探り、地域や家族などを含めて全人的視点から評価し、最善の方針につなげていく診療」を実践した記録が発表されていました。こちらにも指導医・専攻医を交えた **Discussion** によって、よりよいポートフォリオ作成につながる知見が得られたのではないかと思います。

毎月、実施していきます。

☆南砺市民病院回復期病棟ホスピタルアートプロジェクト

2024年9月1日～12月1日まで南砺市民病院総合診療科において医療とアートの学校の村岡ケンイチ氏を招き、3ヶ月にわたる回復期病棟ホスピタルアートを行いました。富山県内のアーティスト30名も参加し、病院スタッフとのヒアリングを行いながら、壁や天井全体のアート制作に病院スタッフとアーティストが全員で取り組みました。またアート活動を通じて病院が地域へ繋がっていくために、病院フェスタでの住民対象のアートイベントや学生による回復期病棟ホスピタルアート対話型鑑賞ツアーをしたり、孫大輔先生（鳥取大学地域医療学講座准教授）をお招きした南砺市見学ツアーや、医療福祉ビジュアルディレクターの河東梨香氏による患者さんや医療スタッフが楽しめる五箇山和紙を用いたちぎり絵ワークショップを企画しました。その集大成として2024年11月30日、12月1日に日本地域医療学会でのブース展示とシンポジウムを企画し、その前後で南砺市民病院においてホスピタルアート鑑賞ツアーを実施しました。アートを通じて院内の雰囲気や患者の気持ちが変わるだけでなく、地域にも繋がりを生む活動になりました。今後もアート関連のイベントを定期的に行っていく予定です。



●石川支部

【活動報告】

第19回北陸総合診療懇話会

2024年10月5日、第19回北陸総合診療懇話会が開催されました。今年は元旦に能登半島地震が発生し、総合診療医をはじめあらゆる医療従事者が被災地域の医療に尽力した経緯があったことからテーマを「能登半島地震を経験して総合診療医ができること」とし、実際に支援にかかわった当事者の経験を聴き、意見交換をする企画となりました。

まず、被災した地域の中核病院からの報告として公立穴水総合病院の中橋毅氏から報告がありました。救急受け入れを止めないために入院患者を可能な限り非被災地区に移して救急医療の人員を確保し、**DMAT**をはじめとする多くの支援チームと連携して地域医療の中核としての活動を維持した経緯が紹介されました。続いて同病院検査部

の佐藤直美氏は病院有志とともにチームを結成し、学会から貸与を受けた携帯型エコーを携えて避難所等を巡回しエコノミー症候群の啓発活動およびスクリーニングを行った様子を紹介されました。食糧事情の悪化に伴う脱水発生や車中泊などは深部静脈血栓症を誘発しエコノミー症候群のリスクを高め、過去の大災害においても課題となっているところです。

福井大学医学部附属病院救急科・総合診療部の林寛之先生からは被災地で十分な医療を受けることができることができない患者を北陸一円の医療機関へ搬送する SCU（広域搬送）活動についてお話しいただきました。災害医療の基本である CSCATTT などを学ぶことができたほか、都道府県の垣根を超えて災害に対応する医療機関の奮闘を知ることができました。

恵仁クリニック・小松市医師会の村井裕氏からは実際に JMAT として医療支援を行った活動についてご報告いただきました。DMAT は主に地域の中核病院の支援を行うのに対して JMAT は主に被災した診療所やクリニックを支援し地域医療の維持に貢献します。クリニックレベルの横のつながりのある JMAT の支援は被災者にとっても個々の温まるものになりました。

富山大学附属病院第一内科の木戸敏喜氏からは、JPCA 能登半島地震支援プロジェクトとやまチームの活動についての報告がありました。主に被害の大きかった輪島市で被災したごちゃまるクリニックを拠点に地域医療の維持に奮闘する様子を聴くことができました。

恵寿総合病院の鎌田徹氏からは後方支援病院からの報告として、能登北部から多くの患者を受け入れた七尾の恵寿総合病院での活動が紹介されました。病院がすでに免震構造で建設されていたため建物の被害を最小限にとどめることができ、早期から医療活動をできたことなどから事前の準備や BCP など大変重要であることが理解できました。

穴水町のまるおかクリニックの丸岡達也氏からは現地の医師として発災直後の緊迫した状態での活動に加えて、災害関連死を抑制するための穴水町医療介護福祉連携協議会の議長としての活動などを紹介されました。能登半島地震の災害関連死数はすでに熊本地震を超えただけでなく、今なお被災家屋や仮設住宅での生活を続けている被災者がいる現状をみると、被災地でのヘルスプロモーションが一層重要となります。被災急性期には DMAT の指揮所を中心に展開されていた地域のヘルスプロモーション活動が医療機関や介護施設の機能回復とともに、DHEAT の支援を受けながら地域の保健所を中心とした活動に移行し継続している現場の状況を知ることができました。

金沢医科大学総合内科学教室の上西博章氏は金沢市内に設けられた 1.5 次避難所での医療活動について紹介されました。1.5 次避難所という形態は能登半島地震で新たに設定されたものであるため前例がなく現場は試行錯誤で運営された様子が紹介されました。また、能登地区からの避難者は高齢者が多いため日常の治療の継続が必要な方が多いことが特徴であったこと、また季節的にも感染症のアウトブレイクなどに対応が必要であったことなどから、今後の災害対応への課題も多いということでした。

今回の懇話会には金沢医科大学を会場に 50 名ほどの参加者が集まりました。総合診療医は様々な診療の場面において、適切な役割を果たすとともに、医師のみならず多職種とも連携して活動できることを特徴としています。そのため、災害時にできること、すべきことは多いと思われ、今回のように様々な現場からの報告を知ることができたことは総合診療医として身に着けるべきスキルを明確にすることができるうえでも有意義でありました。

最後に、被災地域のクリニックからの報告を予定していた輪島市ごちゃまるクリニックの小浦友行氏は懇話会直前に発生した輪島市の豪雨でクリニックが被災したため急遽キャンセルとなりました。輪島市では震災に加えて水害による被災も甚大で、現在もなお医療介護福祉の各方面の支援が必要な状態が続いています。ごちゃまるクリニックを含め、輪島市、能登半島地域に安心できる医療を届け続けることができるよう北陸総合診療懇話会の活動の輪を広げていきたいと考えています。

（文責：公立穴水総合病院・中橋毅）

第19回 北陸総合診療懇話会

「能登半島地震を経験して総合診療医ができること」
金沢医科大学 総合内科
連絡先: 076-286-2211 (内線25404) 中横: tkn@kanazawa-med.ac.jp

日時	2024年10月5日 (土) 14:00 - 17:00
開催場所 (参加費無料)	金沢医科大学 医学教育棟4階 E41 講義室

PROGRAM

日本プライマリ・ケア連合学会の単位認定
専門医・認定医更新のための単位3単位／プライマリ・ケア認定医の認定単位2単位

- 能登半島地震の経験(地域の中核病院からの報告)
演者: 中橋 毅 (金沢医科大学 総合内科学・公立穴水総合病院)
- 能登半島地震におけるエコノミー症候群予防活動
演者: 佐藤 尚美 (公立穴水総合病院 検査部)
- DMATのSCU活動(広域搬送)について
演者: 林 寛之 (福井大学医学部附属病院 救急科・総合診療部)
- 能登半島地震のJMATの活動(JMAT医師の報告)
演者: 村井 裕 (恵仁クリニック・小松市医師会)
- JPCA 能登半島地震支援プロジェクトとやまチームの活動報告
演者: 木戸 敏喜 (富山大学附属病院 第一内科)
- 能登半島地震における後方支援病院からの報告
演者: 鎌田 徹 (恵寿総合病院)
- 能登半島地震における医療介護福祉調整会議の活動
演者: 丸岡 達也 (穴水町まるおかクリニック)
- 能登半島地震における1.5次避難所の医療活動
演者: 上西 博章 (金沢医科大学 総合内科学)
- 総合討論



<支部運営についての情報>

●各県の代表窓口

三重県；若林英樹、富山県；三浦太郎、石川県；吉岡哲也、岐阜県；森田浩之、福井県；林寛之、静岡県；井上真智子、愛知県；佐藤寿一

●プログラム責任者の会中部ブロック代表；大浦誠

●中部ブロックの活動に関するご意見等ありましたら下記までご連絡ください

中部ブロック支部事務局 kimura.etsuko.f2@f.mail.nagoya-u.ac.jp